

クセモノ紳士と偽物令嬢

Sarasa & Tsubaki

月城うさぎ

Usagi Toukihiro



エタニティ文庫

目次

クセモノ紳士と偽物令嬢にせもの

幸せの一步

書き下ろし番外編
婚約者は推し活おかつがしたい

331

307

5

クセモノ紳士と偽物令嬢

第一章

私の人生は波乱ドramaで満ちている——

「お姉ちゃん、今までありがとう」

美しいウエディングドレス姿の花嫁が、私に向けて涙ながらに手紙を読み上げた。

両親を早くに亡くし、姉妹二人で支え合って今まで生きてきたのだ。披露宴の出席者たちが、ハンカチで目もとをおさえているのが見える。

とても感動のシーン。しかし……私と、目の前にいる彼女は、実際は赤の他人である。やはり女は生まれながらに女優だな、という感想を内心抱きつつ、慈愛に満ちた笑みを彼女に向けた。

花染更紗はなぞめさらさ、二十七歳。職業、人材派遣会社勤務の女優。

誰かの日常に入り込み、依頼通りに望まれた役を演じきること。それが私の仕事だ。今回の依頼は、結婚式で新婦の姉を演じることだった。両親と死別し、姉妹二人で生きてきたという設定を演じてほしいと言われたのだが、実際新婦の家族は生きている。

ただ色々あつて絶縁状態だそうで、その内情を相手の家族に知られたくないための策だそうだ。

姉役の方はキャリアアウーマンで仕事が忙しいため、この先めつたに顔を合わせることもない——という設定だ。その後のことは依頼人がなんとかするだろう。

式の終わりまできっちり姉役を演じきり、祝福ムードの中、私はそつとホテルを後にした。

「隣の駅までお願いします」

乗り込んだタクシーから任務完了のメールを送る。

駅に到着したので電車に乗り、そのままオフィスへ戻った。

「ただいま戻りました」

「更紗ちゃん、お疲れ様。どうだった？ 結婚式は」

「はい、問題なく終わりましたよ」

オフィスを迎えてくれたのは、私の義理の姉である千歳ちとせさん。この会社の経理を務めている。

「お帰り更紗」

そしてオフィスの奥の席に座っているのが、この会社の社長、花染若竹わかたけ、三十五歳。私の母の再婚相手の連れ子で、つまり私と彼は義理の兄妹だ。彼は千歳さんの夫でも

ある。

「依頼は無事に果たせたか？」

「もちろん。クライアントの要望通りに演じてきましたよ。報告書を作成しておきますね」

コートを脱いで、アップにまとめている髪をほどく。隣で千歳さんが「せっかく綺麗にまとめたのにもったいない」と言っているが、私は依頼人の姉の姿からいち早く更紗に戻りたい。

「着替えたらちょっと来い。新しい依頼だ」

「はい」

デスク前に座ったまま、義兄がなにかの書類をひらりと見せた。私は事務所奥の控室へ行き、私服に着替える。

母が再婚したのは、私が十八歳のときだ。

実の父は私が幼い頃に病気で他界。それから母は、女手一つで私を育ててくれた。その母が再婚したいと相談してきたので、私は即、賛成した。頑張ってきた母には、幸せになってほしいと心から思ったのだ。

再婚時、私はちょうど大学に入学したばかりで、八歳違いの義兄は当時二十六歳。勤めていた会社を辞めて、一風変わったこの人材派遣会社を設立したところだった。

再婚後、両親は海外へ移り住み、私は一人暮らしをスタート。

義兄とも離れて暮らしていたので、お互い距離感がわからず、あまり兄妹として接してこなかった。ところが、私は大学卒業後に、この会社へ入社することとなる。そこには、私のちよつと変わった経歴が関係していた。

鏡を見ながらつけまつ毛をはがし、メイクを落とす。パパッと薄化粧をし直した顔は、先ほどまで結婚式で涙を浮かべていた、ちよつと派手目の人物とはまるで別人。どこにでもいる十人並な顔立ちの女性だ。

「相変わらず化粧詐欺だわ」

化粧映えするこの顔は、がっつりメイクをするとたちまち別人になれる。

この仕事をするには、平凡な私の顔は欠点ではなく、長所だ。

シンプルなジーンズとカットソーに着替え、義兄のもとへ向かう。

「お待たせしました」

義兄のデスク前に着くと、一枚の依頼書を手渡された。ざつと目を通す。

「久遠寺グループの御曹司直々の依頼だ」

義兄が淡々とした口調で言い放つ。全部を読み終えていなかった私は、思わず目を丸くした。

「え？ あの自動車から不動産、学校運営まで手広くやっている、久遠寺家？ なんて

そんな雲の上の人がうちに話持つてくるの」

怪しさ満点だ。

胡乱な目を義兄に向けてると、彼はあつきさり「こつちにもコネがあるんだよ」と答えた。

「学生時代の友人が、その御曹司様と知り合いでな。その紹介」

「若竹さん、何気に顔広いですよね……」

手もとにある依頼内容を確認する。そこに書かれていたのは、久遠寺グループの令嬢を演じてほしい、というものだった。

久遠寺桜、二十三歳。私より四歳年下のご令嬢という役どころ。

今まで色々な依頼を受けてきたが、今回はさすがに大物すぎる。口もとが引きつった。

「お嬢様になれと？ しかも、ただの金持ちならまだしも、久遠寺家の令嬢って……。なにこの無茶ぶり」

「ああ、依頼人は久遠寺椿。依頼内容は、そいつの妹を演じてほしい、というものだな。期間はとりあえず一ヶ月。報酬は破格だ。断る選択肢はない」

ニヤリと笑った義兄の銀縁眼鏡がきらりと光る。彼は、実に悪どい顔をしていた。

「その目的っていうのが、妹さん宛ての見合いを破談にすることって……。破談にしたのなら、見合い相手を別の女に誘惑してもらえばいいんじゃないの？」

「それはそうだが、詳しいことは本人に聞いたほうが早い。明日来社予定だ」

こんな依頼ははじめてだ。セレブの考えは謎すぎる。

後で久遠寺家について調べておこう。せめてネットに上がっている程度の情報は仕入れておきたい。

私は事務処理を終わらせてから、一人暮らしのマンションへ帰宅した。

翌日の午後、依頼人がお付きらしき人と二人でやってきた。

三つ揃いのスーツをびしっと着こなしたその男性は、思わず頬を赤らめそうになる美形。背もスラっと高い。御曹司なだけでなく見た目もいいなんて、天は二物も三物の与えるんだとこの世の不平等さを嘆きたくなった。

身長は高く、均整の取れた体躯にまとう仕立てのいいスーツは、恐らくオーダーメイドだろう。

癖のない黒髪にすっとした目もととは涼やかで、和装が似合いそうだ。雅やかな印象が漂っている。

そんな艶やかな雰囲気をもとう御曹司様は、歩く姿まで優雅だ。依頼人のプロフィール情報によると、三十一歳で独身。女性が放っておかないに違いない。

「はじめまして、久遠寺椿と申します」

おまけに声までいいってどういうことだろう。

心の声は口には出さず、私は社交的な笑みを浮かべた。

「はじめまして、今回久遠寺様の担当を務めさせていただきます、花染更紗と申します。どうぞよろしくお願いたします」

「こちらこそ、よろしくお願いたします」

そう言っ、久遠寺さんは丁寧に頭を下げた。

居丈高な俺様だったらいやだなと思っていたのに、拍子抜けしてしまう。

向き合っ、何故うちの会社に依頼をしてきたのか、義兄とともに話を伺うことにした。

目の前の彼が少し困ったように眉を下げる。

「お恥かしい話なのですが、私の妹、桜は少々型破りな人間です。幼い頃は病気がちであり学校にも通えなかったのですが、身体が丈夫になったら随分と自由奔放になってしまい……世間が考える久遠寺家の娘のイメージとはかけ離れているんです」

——そう語り出した彼の妹さんは、なかなかに愉快な人だった。

簡単に言えば、豪快な自由人。

子供の頃は病弱で、空気の綺麗な田舎の別荘で育てられたそうなのだが、その後スイスのお嬢様学校に入学。スイスで病氣も完治したそう。けれど病氣が治ってからも年

に一度帰国する以外は、ほとんど外国で過ごしたらしい。

そしていつの間にか、大人しく物静かだった少女は消えて、なにかがスパンツと突き抜けてしまったような性格になっていたのだとか。

久遠寺さんが、お付きの人から分厚いアルバムを受け取る。

「妹が写っています。この辺りから見てくださいとわかりやすいかと」

「では、遠慮なく拝見します」

義兄と一緒にアルバムをめくる。

写真に写っている幼少期の彼女は、病弱な美少女というイメージそのものだった。

癖のない黒髪に青白い肌。物静かな深窓の令嬢に見える。現代の白雪姫と言われてもおかしくないほど。

庇護欲を誘う姿は愛らしいけれど、ベッドの上や室内で撮影された写真ばかりで、病気がちだったことが窺えた。

けれど高校生くらいに成長した写真は、がらりと雰囲気が変わっている。背景から日本で撮影されたものだと思われるには、渋谷などにいそうな派手な恰好をした女の子が写っていた。

ひと言でいえば、ギャルい。

「この、文学少女のような物静かな少女と本当に同一人物ですか？　ものすごい変貌ぶ

りですわね」

「ええ、すごいでしょ」

久遠寺さんは苦笑を禁じ得ないという感じだ。

「離れて暮らしていたせいで、余計気づくのが遅くなったと言いますか……。彼女が通っていたスイスの学校は、規律を重んじるところだったので、息抜きのおしゃれには寛容かようでした。そこで、オンとオフを使い分けていたんでしょね。日本に帰国するたびに明るく元気になったと喜んでいられたのも、中学生まででした。気づけば、オフのほうが本来の妹の姿になっていて。それでも『元気になったらやりたいことを全部やると決めていた』などと言われては、両親も私もあまり強く言えず……。離れて過あごしていたので、余計遠慮があったのでしょうか」

「なるほど……」

アルバムの写真が進むにつれて、メイクはより派手になり、髪の毛は金髪やピンクなど鮮あざやかな色に変化していく。

カラコンもいれて、ついにはコスプレにも手を出していた。

この辺になるとカメラ目線の写真が減るため、どこかのイベントでの隠し撮りかな……。深く突っ込むまい。

「それで、今はどうされているのですか？　うちに依頼があったということは、妹さんは近くにいないか表に出て来ることができない状況だと推測しますが」

え、それって……

義兄の問いかけに妙な緊張を感じながら久遠寺さんを窺うかがうと、彼は笑顔で言った。

「病気で動けないというわけではないんですよ。今も海外で暮らしています。外国育ちですから、日本は窮屈きゆうくつなんですよ」

「今も留学中ですか？」

私の問いかけに対する久遠寺さんの答えは、予想の斜め上をいっていた。

「いえ、大学を卒業後、卒業旅行で訪れた南米で運命の人を見つけたと言ひ、家族に相談なしに現地の人間と国際結婚してしまいました。現在カリブ海のキュラソー島に住み、つい先週妊娠中という連絡が」

「……なんと。それはそれは……」

おめでとうございます、とは迂闊うかつに言えぬ。

キュラソー島は、南米ベネズエラの北にある小さな島だ。港町のカラフルで可愛い街並みは、世界遺産にもなっているらしい。

妹さんから届いた、まさかの報告。ご実家は相当な混乱ぶりだったそうだ。

ご両親は、彼女をグループの系列会社に就職させて、社会経験を積ませながら頃合いを見て縁談をすすめようと考えていたらしい。そんなところに結婚・妊娠の連絡。皆で

頭を抱える羽目はめになった、ということのようだ。

ちなみに上流階級の中では、表に出てこない久遠寺家の令嬢は病弱な美女で、両親に溺愛されているという噂が浸透しんとうしているらしい。

久遠寺家のご当主夫妻が誰にも娘を紹介せず、ろくに存在も明かさないため、勝手なイメージが独り歩きしているのだ。

しかしそれを訂正もできず、かといって本人を紹介もできず。どうすることもできなかった結果がこれだ。

桜お嬢様は後悔しない生き方を自分で選んでいるので満足だそうだが、周りはずもいかないだろう。

言ってしまうえば、どこの馬の骨ともわからない相手の子供を身籠みかごっている現状なのだ。そのことに、久遠寺家の当主は相当ご立腹で、現在妹さんは勘当同然のこと。

「それで、すすめようと画策していた縁談というのが、簡単に断りにくい相手である、と。そのためうちの手助けが必要、ということでしょうか？」

義兄の問いに久遠寺さんが頷く。

「はい、もともとは久遠寺から頼んだ話ですし、お相手も一人ではなくて。それに本人に会わずに断るのは失礼なので、せめて一度お会いしてからではないと……：というのが、私と両親の考えです。そう伝えたとこる妹本人が、誰かに自分の役を演じてもらえ

ばいいじゃない、と」

彼女が自分から言ったのか、それ。すごいな。

でも当人が了承済みなら話が早い。

「妹さんは妊娠中で安易に飛行機に乗せられないし、帰国の意思もないと……：」

「よっぽどあちらの空気が合っているんでしょね。日本には当分帰ってこないと言いつ張っています」

ちなみに妹さんの結婚相手は、リゾート開発やホテルのオーナーをしているようで、生活の心配はないそうだ。とはいえ、堅実な相手と縁を結び、幸せな家庭を築いてほしいと両親には衝撃ばかりだろう。

話が壮大すぎて、激しい……という感想しか出てこない。

しかし破格の報酬を義兄がみすみす逃すはずもなく、彼はじっくり社交的に微笑むと「お任せください」と安請け合いをした。

「依頼内容は久遠寺桜様に代わり、縁談を無事に破談させること。かける期間は一ヶ月。それでよろしいですか？」

「はい、よろしくお願いいたします」

久遠寺さんはまた、丁寧な頭を下げた。

自由すぎる妹を持つてとばっちりを受けているだろうに、心底困っているという風に

見えないのは、彼自身がまとう空気がのんびりしているからか。そもそもこういうときは、久遠寺家に仕える人が依頼に来そうなものなのに、御曹司おんぞうし自ら出向みすかいてくるのがすごい。

美形でセレブ。でも、驕おごったところがなくて、好感度が高い。

「こちらの更紗はかつて人気子役をしていた経歴がありまして、演技力には定評があります。ご要望にお応えできると思いますよ」

義兄がさりと私にブレッツチャーをかけてくる。

私はかつて、小戸森サラこどもりという芸名で子役として活動していた。五歳からの五年間、テレビに出ていたのだ。バラエティー番組に出たこともあるし、大物俳優との共演も経験している。その当時は人気子役として、結構世間に名前が知れ渡っていた。

母が家庭だったため、母の助けになりたいと自分から望んで仕事を始めた。でも十歳になった頃、芸能界に嫌気がさってしまった。

早くから大人と接し、裏側の世界を見続けたせいで妙に達観した子供になっていたし、本当の自分を隠して周囲が望む子供らしい子供を演じるのにも疲れてしまった。

普通の女の子として学生生活を送り、友達だってほしい。

結局私は、十歳という若さで芸能界を引退した。

それ以降、義兄に誘われるまで演劇の世界とは離れていたけれど、今はこの仕事にや

りがいを感じている。舞台がカメラの前か現実世界かの違いだけで、演技をすることに変わりはない。

プロの端くれとして、私も一度引き受けた仕事を中途半端にするつもりはない。やるからには、全身全霊で応えるつもりだ。

「ご希望通りの桜様を演じ切ります。どうぞよろしくお願いいたします」

久遠寺さんがほっと安堵あんどの笑みを見せた。

「ありがとうございます。それでは更紗さんは私の妹として、これから一ヶ月、久遠寺の家に住んでいただけますか？ より自然な兄妹を演じるには、私のことや家のことを知っておく必要がありますので」

「拘束時間によって費用がかかりますが、よろしいですか？」

義兄が口を挟む。

「問題ありません。依頼料は後日請求してください。ああ、更紗さんに必要なものはこちらで揃えますので、ご心配なく」

「そうですか、承知いたしました。では更紗、しっかり役目を果たしてくるように」

「はい。これからよろしく願います、久遠寺さん」

「こちらこそ。では参りましょうか、更紗さん」

「えっ」

参るとはどこに。

応接室のソファから立ち上がり、久遠寺さんが手を差し出す。

困惑しつつもつられるように立ち上がると、彼は私の手をすくいあげ、きゅっと握った。

「まさかと思いますが、今からですか!？」

「ええ、善は急げと言うでしょう?」

微笑みながら、おっとり告げる。

力は決して強くないのに、何故だかその拘束から抜け出せないように感じた。

「安心してください、なんでも必要なものがあれば、言っていただければすべて揃えますので」

「……ありがとうございます……?」

乾いた笑みが零れそうになるのをぐっとこらえる。

そうして着の身着のまま、私は久遠寺家の高級車に乗る羽目になった。

第二章

久遠寺邸は、想像以上の豪邸だった。

セキュリティ対策が施されているゲートは、車が近づくと自動的に開いた。そこから数分車を走らせて、ようやく屋敷の玄関前に到着する。

ここ、都内だよな?

疑わしくなるほどの敷地の広さに、口が開いてしまう。

緑豊かな自然公園と見紛う風景が庭だというのだから、お金持ちの生活はさっぱりわからない。庭だけで一体いくらかけているんだから、お金持ちの生活はさっぱりわ

思わず遠い目になったが、それはまだ序の口だった。

「お疲れ様です、椿様、花染様」

「ありがとうございます、竜胆」

車から降りた久遠寺さんが、運転手を兼ねていた付き人の男性にお礼を告げた。

車の中で説明してくれたのだが、先ほどから気になっていたこの方は、代々久遠寺家に仕える久世竜胆さん。

柔和な笑みにきつちり後ろに撫でつけられた髪の毛で、まさしく執事というイメージだが、実際は執事ではなく家令補佐というものらしい。

先祖代々久遠寺家を支えてきた家柄というのが、今の時代にも受け継がれているとは……。時代錯誤と思わなくもないが、改めてすごい世界だ。

「さあ、更紗さん。どうぞ」

久遠寺さんが私の前にやってきて、手を差し出した。男性にエスコートされたことなんて今までの人生で一度もないため、一瞬間が空く。

「あ、すみません、大丈夫です……」

恐縮しながらやんわりと断った。手なんか握られたら、今以上にカチコチに緊張しちゃうわ。

そして車から降りた私は、目の前の屋敷を見て固まった。

「大きい……」

玄関扉に行くには、両サイドにある階段を上るらしい。玄関前には立派な柱があつて、まるで西洋のお貴族様のお城だ。扉はもちろん両開き。しかも大きい。

「すごい豪邸ですね……。なんとか文化財になってそう……」

「何度か国から言われているけど、断り続けているんだ。一度指定されてしまうと、簡単に修繕もできないからいろいろと面倒でね。ここは、大正時代に建てられた古い屋敷

なんだ。あちこちリフォームしているので、まだちゃんと住めるけど、冬は少々寒いかな。あ、そこ足もと気をつけてね」

これからは兄と呼ぶことになるのだから、お互い敬語はやめようと、車の中で言われていた。とはいえ、私の方はすぐに対応するのは難しい。けれど、彼の口調は随分砕けたものになっている。

玄関扉が中から開いた。

「お帰りなさいませ、椿様」

「ただいま、久世」

初老の男性が丁寧に迎えてくれた。

ロマンズグレーの髪の毛がとても似合うこの人が、竜胆さんのお父様だろう。

久世家に仕える家令ということは、屋敷を取り仕切っているえらい人だ。

「これから桜になってくれる、花染更紗さんをお連れしたよ。後でみんなにも紹介したいから、先に話をしておいて」

「かしこまりました、椿様。お帰りなさいませ、桜様」

「こ、こんにちは……桜です」

なんともナチュラルに桜様と呼ばれてお辞儀をされて、焦りがわく。もしかしなくても、この屋敷に一步入ったところからもう演技が始まっているの!?

展開が早すぎて頭が追いつかない。

てつきりこれから、ゆつくり説明を受けるのだと思っていたのに。まさか速攻で演技テストをされるとは……

なんとか切りかえて、できるだけ落ち着いた感じの笑顔になるよう意識する。

綺麗に整えられた髷ひげに囲まれた久世さんの唇が、につこりと弧を描いた。

「しばらくお会いしない間に、随分落ち着きのある淑女しゅくじょになられましたね、桜様。少しお疲れのようですね。後でお好きな紅茶をお持ちいたしましょう」

「っ！ あら、そうかしら。久しぶりにおいしいお茶が飲めるなんて楽しみだわ」

「一緒に桜様がお好きなケーキもお持ちしましょう。料理長が朝から張り切っておりますよ」

玄関のなかに進むと、使用人の方々が待ち構えていた。十名ほどの方が皆、にこやかに挨拶あいさつしてくれる。

「お帰りなさいませ、椿様、桜様」

着物に白いフリルのエプロンを身につけているこの方々は、女中さんというイメージだ。年代物のお屋敷にメイド服もいけれど、着物というのものなかなかオシヤレだ。レトロなお屋敷にじっくりくる。

「ただいま」と返した久遠寺さんにならって、同じように笑顔を向ける。私が迷わない

ようにか、久遠寺さんがささず私の手を握って振り返った。

「桜は帰って来たのが久しぶりだから、きつと忘れていたよね。部屋まで案内しよう」

「……まあ、ありがとう、お兄様。久々すぎて度忘れしてしまっって」

ああ、やっぱり一歩屋敷に入ったときから、私は久遠寺桜なのね……

せめて車の中で説明がほしかったと内心ほやきつつ、完璧な笑顔を浮かべる。

久遠寺さんのおっとりした雰囲気おんげんきに流されそうになるが、こんな家に生まれた御曹司おんせうしが見た目通りの人のはずがない。一癖も二癖もある、一筋縄ではいかない人だというのがこれでよくわかった。

正直、私の恰好がまだ更紗のままだから、すぐに役に入れと言われても難しいんだけど……。実際の桜お嬢様の口調がどういうものだったのかも、ちゃんと確認しなくては。

一体どこまでが玄関なのかわからない大理石の大広間を進んでいく。土足のままなので、どうやらこの屋敷は見た目通り西洋の文化を取り入れているらしい。

お手頃価格のワンピースにジャケットを羽織っただけの姿が、ひどく落ち着かない。なんかこう、イブニングドレスでも着ていなければいけないような気分になる。

「どうしたの？」

少し足取りが重くなっていたのか、久遠寺さんに訝いぶかしげに問われた。

「いえ、なんでもありませんわ」

付け焼き刃のお嬢様口調で返事をする。そうして少し歩いた先は、エレベーターホールだった。

え、家にエレベーターがあるの？

……ホテルか。

久遠寺さんは、久世さんにお茶を頼むと告げて、エレベーターに乗った。レトロ口かわいらしいエレベーターは、三階が最上階。どうやらそこが私室になっているようだ。

「桜の部屋は僕の部屋の向かいなんだ。覚えておいてね」

「そうね、そうだったわね。ありがとう、お兄様」

二人きりになっても桜お嬢様を続行していると、隣から小さな笑い声が落ちた。

「ふふ、少し意地悪をしてみましたね。部屋に入ったら説明するから、安心して？」

……どうやら私はからかわれていたらしい。

私は部屋に着くまで、意地になつて桜お嬢様らしい口調で「お兄様」を連呼してやった。



「——さて、あらためてようこそ我が家へ、更紗さん」

「久遠寺さん……、いきなりドッキリなんて、なかなかいい性格をしていらっしやいますね」

案内された桜お嬢様の部屋は、一人暮らしをしている私のマンションの倍はある、広々としたところだった。

白を基調とした家具は、きつとヨーロッパの高級家具に違いない。

ゴシック調のシャンデリアに天蓋つきのベッド。

私がいメージするいわゆるお嬢様の部屋より、数倍ゴージャスだった。ここにしばらく滞在させてもらえることがうれしいうより、分不相応すぎて落ち着かない……

若いお嬢さんらしく、ソファはかわいらしいピンク色。そこに座ると、これから兄となる久遠寺さんが向かい側に腰を掛けた。

タイミングよく、久世さんがお茶を運んでくる。

「まるでホテルのアフタヌーンティーですね」

「お気に召すといいいのですが。お好きなものがありましたら、なんなりとお申し付けください」

こぼこぼと目の前で紅茶が注がれる。

サンドイッチ、スコーン、マカロン、一口サイズのケーキ。三段トレイに盛りつけられた軽食とスイーツは目にも鮮やかで、プチセレブ気分になる。一瞬、仕事で来ている

ことを忘れそうになった。

香り豊かなダーズリンティーを一口含む。自分の部屋でティーバッグをちゃぶちやぶさせて飲んでいた紅茶はなんだっただろう。

生まれながらのセレブの久遠寺さんは、紅茶を飲む姿も様さまになっている。スーツ姿で長い脚を組んでいるのもモデルのよう。この人いい被写体になるだろうに、まったく報道されていないのが不思議だわ。

「それで、ここが桜さんのお部屋でよろしいんですよね？」

「そう、君にはこれからこの部屋に住んでもらう。クローゼットの中は好きに使って。必要なものがあれば久世に言ってくれたらいいから。すぐに整えよう」

「ありがとうございます」

とは言っても、ハンドバッグひとつしか私物を持ってきていないから、必要なものがそれなりにあるんだけど。

長期不在にするつもりで自宅を出てきたわけではないので、一度部屋に戻って基礎化粧品やメイク道具、着替えなどを一式ごっそり持ってきたい。

「一度自宅に戻り私物を持ってきたいのですが、よろしいですか？」

「そうだね、もちろん。でも衣服などはこちらで揃えるから、必要最低限のものだけお願いできるかな」

「はい、承知しました」

桜さんの洋服を借りるとしても、サイズは大丈夫なんだろうか。

そういった確認事項がいくつもあるが、まずは私が演じる桜さん像を把握しなければ。「それで、桜さんのことですが。私はどういう役を演じればいいのですか？」

「世間からは、両親に溺愛されている病弱な令嬢、というイメージを持たれている。実際は先ほど話した通りで、今現在の桜は活発で行動的。なにをするかわからない型やぶりな、世間一般で考えられるお嬢様らしくないお嬢様かな。だけど更紗さんには、世間のイメージの桜、つまりできるだけ良家の令嬢らしくしてもらいたい。イメージとしての桜の品位を保ったまま、相手に引き下がらせてほしいんだ」

「具体的には？」

「久遠寺家にふさわしい立ち居振る舞いをお願いしたい。その上で、それぞれの見合い相手の好みの女性であってはいけないから、彼らの好みとは真逆の女性を演じてもらうことになるかな。けれどうちの令嬢としての品位が下がる行動は避けてほしい」

面倒な注文ばかりでごめんね、と久遠寺さんが謝った。

「なるほど、では私は皆様が想像されているとおりのお嬢様を演じつつ、相手の面メンツ子をつぶさないように円満に見合いを破談にすると」

……なかなか難しい注文だな……

そもそもお嬢様生活というものを送ったことがないため、ベタなイメージしか持ち合わせていない。まあだからこそ、それを補うためにこの屋敷で暮らすことになったのだから。

「それでは、大和撫子（おほむすこ）のようなイメージで役作りをしたらよろしいですか？」

久遠寺さんが和服が似合う純日本人の美形だから、桜さんも着物が似合うお淑（しよ）やかな令嬢に見えるよう印象を作ったらどうだろう。

隣に並んで違和感がないように、メイクもオリエンタルビューティーを意識して。

「そうだね……まずは更紗さんが思い描く久遠寺桜を見せてくれるかな。それを見てから方向性を決めよう。でもその前に、お茶を飲むうか？」

久遠寺さんは久世さんに、紅茶のお代わりをお願いした。新しい茶葉のポットが用意される。

のんびりというか、マイペースというか。一分一秒が惜しいビジネスマンという感じではない。この優雅さはさすがだわ。

久遠寺家がいろいろな事業をしていることは知っているけれど、久遠寺さん自身の職業を聞いていない。でもなんとなく、日夜忙しく働く身分ではないと思う。

私はお代わりの紅茶と、久遠寺家のシェフが作ったスイーツをきっちり堪能（たんのう）してから、桜さんのクローゼットを見せてもらった。

六畳ほどの広さのウォークインクローゼットの中は、とてもわかりやく収納されている。季節ごとに分かれているのは衣類だけではなく、靴やスカーフなどの小物類まできちんと分類されていた。

「広い、そしてわかりやすい。……桜さんは物持ちだわ」

たまにしか日本に住んでいなかったはずなのに、バッグと靴だけでいくつあるんだらう。

目の前のハイヒールを一足手に取ってみる。靴のサイズは、私よりワンサイズ大きい。ハイブランドのピンヒールは凶器になり得そうなほどヒールも高いし、歩きにくそうだ。でもそもそも、お嬢様は長距離を歩かないのだから。車移動に違いはない。

「しかし、服装はまるでお嬢様らしくないけど」

そこには、清楚（せいじよ）なワンピースやパーティードレス、着物などはなかった。

ジーンズなどのカジュアルなものと、露出が多く派手な服。ヒョウ柄のミニスカートとか、どこに着て行ったのか少し気になる。

これなら私が持っているお嬢様風ワンピースのほうが雰囲気合うのではないだろうか。

「更紗さん、どうだった？」

声をかけてきた久遠寺さんに「今時の女の子の服でしたね」と答えた。

「ちよつとカジュアルな服装が多いので、私の手持ちのワンピースのほうがお淑やかなお嬢様のイメージが作れるかなと。それで、今から自宅に帰宅してもよろしいですか？」

「もちろん。竜胆に車を出してもらおう」

「ありがとうございます」

エレベーターに乗り、玄関へ向かう。家の中には、絵画や美術品が多く飾られていた。私には値段の見当などつかないが、間違いないとお高いだろう。絶対に触らないようにしなくては……借金を背負いたくない。

「竜胆、更紗さんをご自宅へ連れて行ってくれるかな」

「かしこまりました、椿様。車を回してきます」

「ありがとうございます、竜胆さん。お手数をおかけします」

先ほど同じ車に誘導されて、後部座席に乗ったところで反対側のドアが開く。

ん？　と思った直後、何故か久遠寺さんが乗り込んできた。

「えっと、久遠寺さんも来るんですか？」

「うん、興味があるからね。あと僕のこととは久遠寺さんではなく、名前かお兄ちゃんと呼んでほしいな」

興味があるって、なににだ。私のマンションに来て、部屋には上がらせないけど。

バックミラー越しに、久遠寺さんに向けて竜胆さんがちらりと視線を投げた。その表情は、なにかを語っているように見える。

「桜さんはなんて呼んでいたんですか？」

「妹は僕のことをお兄ちゃんと呼んでいたよ。一般的な兄妹のようにね」

義理とはいえ兄がいる私だが、若竹さんをお兄ちゃんと呼んだことは一度もない。両親が再婚したとき、二人とももう子供ではなかったし、気恥ずかしさもあったのだと思う。今は一応会社の社長でもあるし、ますますもってお兄ちゃんと呼ばびづらい。

笑顔のままじつと私を見つめる久遠寺さんから、無言の圧力を感じる。

これも役作りかな……と納得し、私はあっさり「それでは、お兄ちゃん」と呼んだ。

「うん、うん……悪くないね」

二、三度頷いて満足そうに笑う彼に、選択を誤ったと感じた。

「やっぱり椿さんで」

「それは却下」

私に選択肢はないじゃないか。いかにも育ちが良くておっとりしているのに、押しが強さを感じる。

けれどクライアントの意向にはなるべく添うべきだと判断し、私は一言「承知しまし

た」と返答した。が、久遠寺さんの眉が僅かにひそめられる。

「さつき車の中でも言ったけど、君の敬語も今後はなしで。本当の兄妹を演じるんだから、敬語はおかしいでしょう?」

「……そう、ね。わかったわ、お兄ちゃん」

満足そうに久遠寺さんが前を向いた。だから、これが正解だったのだろう。

だが本音を言えば違和感が半端ないし、竜胆さんが無言ながらも心の中で突っ込みを入れていく気がしてならなかった。

義兄のオフィスがある場所から電車で二駅の場所に、私の自宅のマンションがある。1Kだけど、一人暮らしには十分なスペースがあり、治安も良好。さらに言うなら、最寄り駅から徒歩三分。

スーパードもコンビニも近所にあるし、過ごしやすく便利だ。

久遠寺邸から車で約三十分で、私のマンションに到着した。目立った混雑もなくスムーズに動けたのでよかった。

「すみません、駅前のスーパードの駐車場にでも車を停めておいてもらえますか。そこにコーヒーチェーンのカフェもありますので、ゆっくり休んでください」

マンション前で下車するときにそう告げる。

竜胆さんが「かしこまりました」と承諾したが、久遠寺さんは手伝いを申し出てきた。

「いえ、お気持ちだけで結構です」

「敬語に戻っているけれど」

「レデイの部屋になんの準備もなく入ってこられたら困るのよ、お兄ちゃん」

私の部屋は、すぐにお客さんを招ける状態ではない。そもそも二人で作業するようなスペースもないので、やはり断固拒否だ。

私の碎けた口調が気に入ったのか、彼はそのまま引き下がった。

「そう、じゃあ終わったら連絡して」

電話番号を交換し、私はようやく自宅へ戻る事ができた。

「さてと、なにから手をつけていいやら……」

まずは、クローゼットに収納しているスーツケースとポストンバッグを取り出す。仕事道具としても使っているメイク道具一式とウィッグは、マストアイテム。自分に合う靴も必要なので、パーティー用のパンプスやスーツに似合う靴など数足見繕って袋に入れる。

清純派な彼女役を演じたことも過去に何度かあった。そのときに用意したワンピースを二、三着選び、あとはキレイ目系のカットソーやスカート、カーデイガンなど。

念のため通帳やパスポートなどの貴重品も持って行こう。使わない部屋に長期間置いていくのは不用心な気がするから。

それらはハンドバッグに入れて、荷物を閉じる。あつという間に、スーツケースとボストンバッグがパンパンになった。必要最低限の荷物だけに抑えようと思っただけでも、海外旅行に行くような量になってしまったのは仕方ない。

「あ、冷蔵庫の中とかどうしよう。冷凍できるものは冷凍して、生ものは捨てていくか……」

もったいないけれど仕方ない。

「急いだけど、一時間近く経っちゃった。久遠寺さんたちに電話するか」

玄関扉を施錠し、マンションを出る。周囲に、大荷物を持って出かけるのを見られるのは防犯上よろしくないの、すみやかに通りに出て二人がいると思われる駅前のコーヒーストアに向かった。

スマホを取り出し、電話をかける。

コール音が一度鳴っただけで、すぐにつながった。

『桜？』

出るの早っ！

動揺したものの、人目がある外では、徹底的に兄妹にならなければいけないことを思いつく。どこで誰が見ているかわからないのだ。

私は、私が考える普通の妹らしい返事をした。

「もしもしお兄ちゃん？ 今どこ？」

『桜が教えてくれたカフェにいるよ』

「わかった、今お店の前に着いたから、中に入るね」

スマホをハンドバッグに入れて、スーツケースを引く。傍で聞いてたら、兄妹の会話にしか聞こえないはず。けれど、平凡な顔の私が久遠寺さんの隣に並べば、血のつながりを疑われそうだが……

「ずっと一人っ子だったし、若竹さんは兄といつてもちよつと違うし。血のつながった兄妹かあ……難しい」

「いらつしやいませ」というカフェ店員に会釈をして店内を見回すと、一際女性客の視線を集めている二人組の男性が視界に映った。

ホテルのラウンジで一杯千五百円くらいするコーヒーストアをゆつたりと満喫していきそうな雰囲気を持つ男性たちが、久遠寺さんと竜胆さんだ。そんな二人がカジュアルなコーヒーストアにいることが不思議でならない。

私が近づく気配を感じたのか、久遠寺さんが振り返った。

「桜」

ふわりと微笑んだ姿に、周囲の人間が息を呑む。

超絶美形な久遠寺さんと、執事のような制服を着ている竜胆さん。二人が並んでいる姿は絵になる。

どこかでカメラが回っているのでは？　と思っ
ているお客さんもうそうだわ。
なんていう破壊力のある笑顔なんだと唸りそうになるのをこらえて、私はあくまで妹として彼に近づく。

「ごめんね、遅くなっちゃった」

「大丈夫、もう飲み終えたから。桜もなにか飲む？」

「ううん、私は大丈夫」

立ち上がった竜胆さんがサッと私の荷物を受け取り、久遠寺さんが手を握ってくる。

「そう、じゃあ行こうか」

ん？　と疑問符が浮かぶが、颯爽と歩き始めてしまったので後を追うしかない。周囲の人の視線が痛い。

店員さんの「ありがとうございます」という声が扉越しに聞こえた。

「えっと、お兄ちゃん。いい歳した普通の兄妹って手を握らないと思うんだけど」

恋人同士でもあるまいし。

「うん？　昔から桜と歩くときは手をつないでいたよ。なにもおかしくないじゃない」
え、そうなの？

思わず竜胆さんを見上げると、彼はにっこり微笑みかえした。これは肯定なのだろうか。いまいちわからん。

「そっか、そうだっけ」

あははと笑い、手はそのままにして駐車場へ向かう。

眉目秀麗な男性と手をつなぐなんて、そうそう体験できることではない。妙な緊張感が漂う中、私は妹、私は妹……と自己暗示をかけて、なんとか意識的に笑みを作り続けた。

確か桜さんと久遠寺さんって八歳違うんだっけ……？　年齢が離れていれば、妹さんにも過保護になるんだらうか。

荷物をトランクに詰めてもらい、後部座席に座った。隣に久遠寺さんが座り、シートベルトを着ける。

「桜様、ほかに寄るところはございませんか？」

「大丈夫よ」

なにかあったらそのときまた帰ってくればいいだろう……という浅い考えは見抜かれていた。

「これから契約が終了するまで桜として行動してもらおうから、自宅はおろか、オフィスにも近寄らないでね」

久遠寺さんにさらりと言われた台詞せりふにギョツとする。が、すぐにそれも仕方ないと納得した。

「わかりました。ただ、上司への報告は必要になります。久遠寺さんのお屋敷から、私のスマホを使うことは問題ありませんか？」

「自宅からなら。でも外では身元がバレるものは一切持ち歩かないように。あとで桜用の携帯を用意させよう。竜胆、頼んだよ」

「かしこまりました、椿様」
なるほど、徹底している。

自分ではない誰かになることは、容易ではない。どこかでボロが出ないように、身元がバレる要素は排除するべきだ。

それなのに私を一度自宅へ帰らせてくれたのは、彼らなりの優しさだったのだろう。

いささか展開が急すぎるけれど、それは仕方ないことだ。久遠寺さんがうちの会社に来たところを何度も目撃されると、桜が偽物にせものだとバレる確率が上がる。桜が偽物にせものだと知られると、久遠寺家の評判も落ちてしまう。

……あらためて考えると、私、随分ずいぶんな大役を引き受けてしまったのでは。今さら遅い。

「ほかに注意事項がございましたらお知らせください。とりあえずお屋敷に着くまでは、

花染更紗として対応させていただきますね」

「そうだね、じゃあ今のうちに更紗さんに聞いてみたいことがあるんだけど、いいかな」

「ええ、私で答えられることでしたら」

これからしばらく、更紗の存在は消える。私自身のことを話すなら、今しかないだろう。

とは言っても、一体なにを聞かれるか見当もつかないが。

「花染社長と同じ名前だけど、二人は兄妹なんだっけ？」

「親の再婚の連れ子同士なので、義理のですが兄妹にあたります。とはいえ両親の再婚時、私も成人間近でしたし、義兄はとくに社会人でしたので、あまり兄妹という意識はないですね」

「かつて子役をしていたという話は？」

「事実ですよ。五歳から十歳まで、テレビに出てました。小戸森サラという名前で」

続けて、代表作のテレビドラマをいくつか告げる。意外にもそれに反応したのは竜胆さんだった。

「懐かしい、覚えてますよそのドラマ。道理で、どこか見覚えがあると思いました」

「ありがとうございます」

昔の話をするのは気恥ずかしい。かつてテレビに出ていた面影がほとんどないほど、平凡に成長したから余計に。

子役時代、私の特技は泣く演技だった。自由自在に涙を流すことができたので、感動的なヒューマンドラマとか家族愛のドラマによく出演させてもらっていた。

「本当だ、検索すると写真が出てくるね」

「恥ずかしいのであまり見ないでくださいね」

久遠寺さんが、手持ちのタブレットで検索した結果を見せてくる。

子役のときはかわいくても、成長するとパツとしなくなる人の話をよく聞くが、私は自分もそれに当てはまると思っている。

芸能界引退は中学受験のためと公には言っていたが、単純に自分が表舞台に向かないことと、芸能界に嫌気がさしたことが一番の理由だ。人の視線に疲れてしまったというのも、理由のひとつである。

「普通の女の子に戻ってから、学校では演劇部とかに入っていたの？」

「いいえ、まったく。そういうのとは無縁に過ごしましたよ。中高は女子校に行って、かわいい制服のある喫茶店でバイトしたり、友達と寄り道したり。普通の女子高生をしていました。それで子役時代に稼いだお金を学費にあててましたね。母子家庭だったので」

「そうか。じゃあこういうお仕事をされているのは少し不思議だね」

「人生わからないなってよく思いますね。今はカメラの前でなく、日常にこそ舞台があるって思いますけど」

当時の華やかさとは無縁の生活だけど、私にはこっちのほうが合っているし、今の生活が楽しい。

仕事としてしているのは、裏方の人生。でも、誰かの表舞台に携わることができ、貴重な仕事だ。

失敗が許されない緊張感も、スリルがあり気に入っている。

「なるほど、そうだね。映画やテレビと違って人生にはシナリオがないから一発勝負だし、スリルも違いそうだ」

「リテイクがないから、緊張感が違いますね。はじめは義兄の仕事を手伝うのは乗り気じゃなかったんですが、今は天職だと思ってます」

ちよつと言い過ぎたかもしれない。天職ではなく適職かも。

けれど久遠寺さんがおっとり微笑むから、訂正する気が失せてしまった。

そんな会話をしていたら、車は久遠寺邸に到着していた。屋敷の玄関前に車を停車させて、荷物を下ろす。

「お部屋へお運びしましょう」

出迎えてくれた久世さんが、スーツケースとボストンバッグに手を掛けて言った。

「ありがとう、久世さん」

「どうぞ私のことは久世とお呼びください」

「……慣れるよう努力するわ」

壮年の男性を呼び捨てにするのは抵抗があるけど、これにも慣れなければ。

いまいちスイッチが入らないのは、やはり私がまだ更紗の恰好のままだからだろう。

桜さんの部屋に戻り、荷物を広げる。スーツケースの中から、私が考える桜お嬢様っぽいワンピースを取り出した。

「実際の桜さんは好まないだろうね、こういう大人しいワンピースは」

行動力があり好奇心旺盛な桜さんは、保守的な服装よりもっとはじけた感じが好きそうだ。

でも、それらを着こなす自信もないし、そもそもそういった服では求められている「桜お嬢様」を演じられない。だから私は、演じる役柄の桜お嬢様に似合う服を選ぶ。

私の胸もとまでの髪の毛は、今はアレンジしやすい長さで、カラーリングも少ししている。けれど久遠寺さんの要望に合わせるなら、久しぶりに黒髪に戻したほうがいいだろう。

後でやることリストに加えておこう。

着替える前に、洗面所でメイクを落とした。

鏡に映った顔は、化粧を落とす前とあまり変わらない。

化粧水で肌を整えて、丁寧に下地を塗る。赤みを抑えるコントロールカラー入りのコンシーラーを気になるところに使い、ブラシでファンデーションを肌に重ねた。チークを入れて、小顔効果が出るような顔の輪郭にシェードもいれる。目もとにはパール入りのアイシャドウを塗ってからピンクとブラウン系を塗り、きつくなりすぎないようにアイラインを入れる。軽くビューラーでまつ毛をあげて、目のふちに部分用つけまつ毛をつけた。

「お兄さんの目もとがすつとしているもんね。桜さんも写真によるとオリエンタルビューティー系だし、がつつりつけるとやりすぎかな」

桜さんがパツチリした目だったたら二重の幅を広げたりという加工が必要だったけど、つけまつ毛くらいで大丈夫そう。私の目も二重ではあるが、幅は広くない。目の形はアーモンド型だ。

きつすぎず、濃すぎず、美人に見えて清楚な感じに。

それが私が考える、桜お嬢様のイメージ。

眉毛はカーブを作りすぎずナチュラルに。ちょっとミステリアスな印象にしたいけれど、眉毛は前髪で隠れるだろうから気合を入れすぎなくても大丈夫。

「うん、悪くないんじゃない？」
 ウィッグをかぶり、紺色のワンピースを着てハイヒールを履いた自分を姿見で確認する。

「あ、仕上げにルージュを塗るのを忘れてた」

メイクボーチから薄ピンクのルージュを選び、グロスも重ね塗り。艶やかで華やかな印象の唇が完成した。

自分であつて自分ではない人物の顔を見つめながら、口角をあげる。

「さて、行くか」

鏡の前で呪文を唱える。と言っても、白雪姫の魔女ではないけれど。

「私の名前は久遠寺桜。久遠寺家の令嬢で、誰も姿を知らない、高嶺の花のお嬢様」

一目会いたいと願う男性が数多くいる、深窓の令嬢。

彼らの理想を叶え、そのうえで、自分では釣り合わないと身を引かせるくらい美しく凛としたお嬢様になつてみせる。

背筋を伸ばし胸を張って、優雅に一歩踏み出した。ヒールが軽やかな音を奏でる。

扉を出て、向かいの部屋の扉をノックした。

「はい」

中から久遠寺さんの声が聞こえる。

「お兄ちゃん、開けていいかしら？」

「どうぞ」

承諾の声に、扉を開けた。

男性の部屋に入室するのは、考えてみたらはじめてかもしれない。女性の部屋とは違った香りがする。

二十畳ほどの部屋の壁は、一面が本棚だ。ダークブラウンで統一されている家具は温かみがあって、重厚感もある。若い男性の部屋というより、初老の紳士が落ち着いた空間を求めてデザインしたような部屋だ。

アンティーク調のソファに座り、お茶を飲みながら本を読んでいた久遠寺さんが立ち上がった。その顔には、少し訝しむような表情が浮かんでいる。

「桜？」

「ごめんなさい、読書の邪魔しちゃった？」

久遠寺さんが薄く口を開けて、私を凝視する。その表情から、無事に役作りが成功したことを悟った。

外見の作りこみ方は、一応クリアだろう。

私は本物の桜ではない。

けれど、外国暮らしが長い本物の桜お嬢様を知る人物は、日本ではほとんどいない。

ならば私が演じるお嬢様が、これからしばらくの間、他の人間にとって本物になる。
潤いたつぷりの唇の口角を持ち上げた。手先から足のつま先まで意識する。背筋を
びんと伸ばしたまま、美しく見えるようにゆっくり近づく。

「どうしたの、お兄ちゃん？」

反応がない久遠寺さんに再度呼びかけると、彼は目じりを下げた。

「うん、女の子はすごいね。それが、桜か。……彼らが想像している通りの、久遠寺家の令嬢だ」

感嘆の声をあげながら、久遠寺さんが近づいてくる。脚が長いから、一步が大きい。優雅に歩いているのに、あっという間に距離を詰められてしまう。

掴みはOKの感触に、内心ほっとした。

が、目の前にやってきた久遠寺さんにふいに顎を持ち上げられて、心臓がドキッと跳ねる。

無意識な身体の反応は修業が足りない証拠だ。でも、不意打ち攻撃反対っ。

「なあに？ いきなり触るなんて失礼じゃないかしら」

「そう？ 僕は昔から桜とはスキンシップをとっていたよ。僕に触られるのは嫌い？」

「……嫌じゃないけど、心臓に悪いわ」

「ふふ、照れた顔もかわいいね、桜は」

するりと頭を撫で、髪の毛をひと房持ち上げる。そのまま毛先を口もとに運び、彼はチュツとキスを落とした。

「……っ!?!」

心臓がドクンと跳ねる。それでも、内心の動揺を必死に押し殺した。

地毛じゃなくてウィッグだけど、だからといって精神的にノードメージなわけではない。

普通の兄妹関係がよくわからないが、これはアリなのかナシなのか。一般的にナシな気がするんだけど……。純日本人の顔をして、実は欧米人の血が入っているの？

でも待って。

褒めて髪チューという高度なテクニクは、私のリアクションを見るためにわざとしている可能性もある。今日一日で、この人が見た目通りの癒し系な美形ではないことは把握済みだ。

「ねえ、お兄ちゃん。お願いがあるの。逆に驚く顔が見られそうだし。

するりと、久遠寺さんの腰に腕を巻きつける。スキンシップ過多な兄妹なら、ハグもきつと日常的にしているはずだ。

「桜が僕にお願いごとなんて、一体なにかな。？」

甘えた声を出した私に、久遠寺さんの声にも甘さが増した気がした。彼の腰に緩く両腕を絡めていた私に対し、久遠寺さんは自身の腕をぎゅっと私の腰に巻きつけてくる。これではまるで、恋人同士がきつく抱きあっているような体勢だ。どう考えても、初対面の距離感ではない。

せめて、妙な緊張と色香にあてられて心臓がドキドキしていることだけは気づかれたくない。

腰は密着させたまま胸の間にスペースを作り、私は首をあげて久遠寺さんを見つめた。そして上目遣いで告げる。

「私のお見合い相手、そろそろ誰だか教えてくれない？ お見合いで結婚するつもりはないんだから、作戦練って断らないと。皆さん忙しい方でしようし、早めに準備をしておけば安心よね」

この人の隣、心臓が悪い。

本題に入ってちゃっちゃと任務を完了させねば。

そんな私の内心を知ってか知らずか、久遠寺さんはまるで恋人を甘やかすような手つきで私を抱きしめては頭を撫でている。そして、頬に手を添えて微笑んだ。

「もちろん、準備はできているよ。桜の理想は恋愛結婚だもんね。僕の目が黒いうちは、大事な妹を家柄と地位しかとりえない男になって渡さないから安心して」

……いやいや、全然安心できないじゃん。

お兄さんの目が届かなかったから、桜さんは奔放な女性に成長した拳句、出来ちゃった結婚。しかも日本から遠く離れた外国の地で、国際結婚よ……

矛盾に内心首を振りつつも、まあ演技だからいいのかと無理やり自分を納得させた。

「ありがとう、お兄ちゃん。頼りにしてるわ」

だからそろそろ腕を離してくれませんかね。につこり微笑んだまま見つめ合う。

けれど久遠寺さんは、竜胆さんが呼びに来るまで一向に私を解放することなく、兄妹愛を發揮し続けたのだった。

第三章

——五条遊馬、二十五歳。

彼は久遠寺家と並ぶほどの旧家、五条家の一人息子で、容姿端麗、頭脳明晰と評判。幼い頃から飛び級を繰り返し、十九歳の若さで英国の大学を卒業とのこと。

絵に描いたようなお坊ちゃまで、現在は五条家の子会社の部長職に就いている。御曹